

琉球大学学術リポジトリ

マレーシアの主要作物における研究の成果と方向

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: タン・ホーヒン メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016985

8. マレーシアの主要作物における研究の成果と方向

マレーシア農業省（現在：琉球大学農学研究科） タン・ホーヒン

マレーシアの面積は 33 万平方キロで、日本よりやや狭く、人口は約 1,600 万人である。国内総生産額に占める農業生産額の割合は 20 % である。主要作物は、ゴム、油ヤシ（オイルパーム）および稲であり、1983 年の統計によれば、半島マレーシアでは総栽培面積 400 万 ha の内ゴムが 43 %、油ヤシが 31 % および稲が 14 % を占めている。マレーシアはこれらゴム、油ヤシ油の最大生産国で、ゴムは世界総生産高の 35 %、油ヤシ油は同 56 %（食油需給全体の 9 %）をまかなっている。またマレーシアはこれら作物の生産技術が最も進んでいて、世界におけるこれら作物の生産技術開発の主導的立場にある。ところが稲の生産に関してはまだ発展途上の段階にあり、政府による肥料の無償供給、補助金の交付により 80 ~ 85 % の自給率を維持している。

マレーシアにおけるゴムの育種は、現存の育種系統を選択的に交配して品種改良を行い、生産性を 1 ha 当たり 500 kg から 2,000 kg まで増加させた。しかし、近年はその増加の程度は著しく低下している。これら収量の増加率の低下に対する対策として、1981 年にゴムの原産地であるブラジル政府の協力により多数の germplasm materials を収集し、これらの収集系統の優良遺伝子を利用することを図っている。以上の育種的研究成果の外に "cut" という収穫技術による省力化、育苗技術による収穫までの期間の短縮化、原料の加工による生産物利用の多様化等の業績が主な研究成果としてあげられる。

一方、油ヤシはゴムと異なり、芽接ぎによる栄養繁殖ができなく、今でも品種普及は "テニラ" という雑交種子の利用に依存しなければならない。現在の優良交配種の油収量高は年間 1 ha 当たり 6 ~ 7 ton に達している。また 1977 年に組織培養による種苗生産が可能となり、多くの研究機関において大規模な研究が行われているが組織培養技術の実用化にはさらに解決すべき問題が残されている。

稲に関しては、マレーシアが稲研究開発事業を本格的に発足して以来約 20 年間を経過した。この間に品種改良はマレーシアにおける稲作が二期作を主体とするため、二期作用品種の育種が中心となった。しかし、二期作の栽培体系に伴い病害虫の多発、労働力の不足、灌排水不良下での大型機械の普及による圃場基盤の破壊等の問題が生じ、これらの問題点への対策が同時に研究の主要な課題とな

っている。稲の研究については従来より日本農林水産省熱帯農業センターの協力があり、さらに同機関との共同研究も現在継続されている。